

随想



ツノ

松下 博

こどもをあつめて、イチニイチゼー
ン、と叫んでいるロングランのお爺さん
がいたり、食品の広告で商品におじま
まするカップルがいたり、三〇秒のフイ
ルムがないのか、あるいは殊さらになの
か一五秒のCFを二度も繰返しているの
があったり、印象派の展覧会がやってく
るのかと思ったら、ナント現代の美術団
体展のコマーシャルであつたり、SFふ

うであつたり、痴話げんかふうであつた
り……なんとも多種多様なコマーシャル
が（テレビをつけていることだが）絶
え間なくとびこんでくる。なかでも頻度
がたかいように思うのが、インスタント
コーヒーや洋酒、カメラ、メガネ、ラー
メン、コンパインなんかと並んでクルマ
の広告。クルマやさんの広告は、それら
しく映像、音ともにスピード感があふれ
ていて、カーマニアのどら息子をもつ親
には嘆きのコマーシャルとなる。なかに
はソコクニッポンの道路を走る国産車の
身でありながら、ヨーロッパの景色やな
んかをうしろにして走ったりして、売る
ひと買うひとともに彼の地によわい性を
さらけ出すことになる。しかし、外国に
よわいのは今に始まったことではなく、
遠く古代にまでさかのぼるのであるから
して非難することはないのであるが、今
は今はなしである。

さて、その自動車の広告を拝見してい
て、いつも気になっていたのが、クルマ
のボディ先端の両側に突きだしているサ
イドミラーであつた。メーカーにより形
は各種だが、うしろのクルマにたいして
設けられたこのミラーの存在を、はじめ
は気にもとめなかつた。それが先年、イ
タリアの街でよく案内してくれた日本
人の絵かきさんに「気づかないかね、こ
こではクルマにサイドミラーがないん

だよ」と教えられてからというものの、ク
ルマのサイドミラーを気にするようにな
つた。そこではサイドミラーは運転席の
横に、一個だけ申しわけのように付いて
いた。なぜこういうことになっているか
という、イタリア人はクルマの線が崩
れるのを好まないからだということであ
つた。ノミミラーを認識していろいろ、旅
行中他の国々でもクルマの先端部を注意
してみたが、わが国のようにツノを二本
つきだして走っているクルマを見ること
がなかつた。せいぜい片側に付いてい
て、それも運転席へ引きよせた感じで、
ミラーは付いていない。

テレビで海外番組や洋画劇場などの画
面に乗用車が出てくると、クルマの前の
方を見るのがくせになつた。ここでもサ
イドミラーは、存在を主張することな
く、ひそかに付いているようであつた。
そこへ、われらがぐにの最新大発売のコ
マーシャルである。映像効果よろしくう
つしだされたカッコよきさんだが、こち
らはやっぱり、ツノが二本、によきり
突きだして、意識しだすとそれは生
きものめいてくるのであつた。これは交
通ラッシュのクルマの列のなかで実感で
きる。カイトたちはツノをふりたて
て、われ先に先を急いでいるのであつ
た。

（画家・元熊本日日新聞社編集局長）

フンコロガシの唄

（公務員の妻の手記）

佐藤 千里

ファーブル昆虫記に出てくるフンコロ
ガシとは、黄金虫の一種で、動物の糞を
自分の体の数倍もの大きさに丸めて食べ
ている昆虫です。

愛するフンコロガシのおかみさんは、
今日も十年一日の如く糞を丸めていまし
た。そして疲れた前脚を休め、半分程出
来上った西洋梨型の糞玉を眺めながら、
よくもまあ人生の大部分を今日迄宮々と
丸めてきたものよと、彼女にしては珍ら
しく或種の感慨に浸るのでした。

嘗ては、役所がひけると一緒になつて
糞の山から材料を掻き取ってくれた公務
員の夫も、今では定年前のあせりから
か、或は住民の為にあまり役立っていな
いのではないかと不安からか、赤提灯
に寄る事が多くなり、たまに早く帰宅し
ても、いびつな糞玉などおびなりに作っ
てよこすのです。そして又、知能はどう
やら少し遅れてはいるものの、体だけは
グラマーに育つた娘達は、甲の艶をやた

らと気にしたり、若い男性の傍をしなを
作って歩くようになりました。そして最
後に、この私ときたら、なりふり構わず
働いている中にこんな老け込んでしま
つて……。おまけに戦争中に育つた悲し
さ、食糧不足に備えて大食いの家族達の
為に余分の糞玉を物陰に貯えたりして毎
日を過ごすのです。

次の日、おかみさんは娘も連れずに思
い切つて一人で映画館に向きました。
そして、十何年振りかですこのワイド・
スクリーンに見たものは、まぶしい陽の
光と、広々としたサバンナの風景でし
た。丁度画面は一匹の雌ライオンが鹿の
群を追っている所でしたが、命がけで逃
げているはずの鹿達の跳躍が、アフリカ
の夕陽の中では、軽ろやかなバレリーナ
の乱舞に見えるから不思議です。逃げ
遅れた一匹がとうとう犠牲になりました。
すると間もなく、一匹の雄ライオン
が灌木の陰からゆっくりと歩いて来て、
雌が今しがた捕えた獲物を悠々と食べは
じたのです。そして雌はと見ると、母性
的寛大さをその体中に漂わせながら、雄
の食べ残しと一緒に食べようと、子供達
を連れに行くのです。

もういい加減男の横暴さにうんざりし
ていたはずのおかみさんでしたが、この
シーンには何故か抵抗を感じませんでした。
それは、ライオンの雄があまりに優
しく哀しい目をしていて、その少し骨張
った肩の辺りに、野性の動物の哀しみを

すっかり背負っているように見えたから
です。そしておかみさんは、今更のよう
に、こんな雄の美しさと雌の優しさに久
しく接していない事に気がつきました。
組織という非情な歯車の中では、何時か
他人の痛みには冷淡となり、駆け引きの
みちらつかせている男と、歪んだ自己主
張でささくれ立っている女の目に世の中
は溢れているようです。
年よりも大分老け、女とはもう誰も認
めてくれそうにないおかみさんですが、
それ以来こっそりとアフリカ行きの旅行
案内書を取り寄せはじめました。一生徒
労つづきのようなおかみさんですが、雪
を頂くキリマンジャロを背にしたライオ
ンの一家を見てみると、その時だけ自分
が生きているように思われるからです。

（熊本県詩人会会員）

伊吹六郎さん

のこと

吉村 滋

緑川の川幅が広がって、晴れた日に
は、白く光って流れる水が、瀬音とも
に、心のなかに帯状に情感のさざ波を立

ててくれるところがある。バス停には辺
場と書かれていて、伊吹六郎さん（富永
彦十郎）の屋敷がいまも残っているが、
主人公が東京に去ってから十数年にな
る。

伊吹さんには、昭和二十八年に文芸雑
誌「詩と真実」の同人に加えてもらつて
以来、なにかと指導を受けてきた。当
時は、九品寺の家によく出掛けて、お酒
をご馳走になった。近所に「どん底」と
いう、気のおけない飲屋があつて、いま
は亡き詩人の長谷敏男さんや汐見純一
郎さん、高木護さん、高橋伯夫さんなど
が集まり、夜の更けるのも忘れて語り合
つたものである。懐工合の豊かでない者が
多く、勘定でも随分迷惑をかけたことと
思う。

一昨年の冬上京した折り、新宿の紀伊
国屋書店前を集合場所にして、近くの小
料理屋にはいり、伊吹さんを中心にシャ
ブシャブ鍋を囲んだことがある。高橋さ
ん、高木さん、飯尾憲士さん、島一春さ
ん、田代富士夫さんといった懐かしい顔ぶ
れで、話は熊本のことに集まつた。

伊吹さんはすっかり頭髪が薄くて白く
なり、歯も大方抜けているので、肉を噛
むのに、パクパク、しきりに上下の顎を
動かした。どうして入れ歯をしないのか
と聞くと、残っている歯も全部抜かんと
されん、と医者が言うので、しとらん。
まだ使ゆる歯は、わざわざ抜くこともな
かまん、と答えて、

「ばってん、滋さん。年寄りのごつな
つて、やっぱ調子のおかしかなあ」

と言いなながら、お汁をスーッと吸い上
げた。温顔の口許が、両頬にニッケ玉一
個ずつ分ぐらい落ちくぼみ、それは抜け
た歯の容積を示すものに相違なかつた。

伊吹さんは、自分でもおかしなつた
のか、プーッと吹き出し、口中のものが
外に出ないように、あわてて掌でふたを
した。悠然としたものを、そのとき私は
伊吹さんに感じた。さすが豪族の出身だ
けに、ノープルな風貌を備えている伊吹
さんも、上京後の風雪には厳しいものが
あつただろう。にもかかわらず、入れ歯
の話から、たくましくしてにじみでたその
ユーモアには、一つの世界を体得した人
にしか味わえない落着きを感じられた。
酒が回って、私はうたつた。

緑川白く流れたり

時されば皆幻想は消え行かむ

われらの生涯（らいふ）を釣らんとして

過去の日川辺に糸をたれしが

ああかの幸福は遠きにすぎさり

小さき魚は瞳（め）にもとまらず

萩原朔太郎の郷土望景詩の一つ、広瀬
川を緑川に置きかえたものである。伊吹
さんは、この詩を私がうたうのを、以前
から好んでいた。

辺場のあたりの緑川は、晴れた日には
いまも白く流れている。
（詩と真実同人）